

幕末維新期は、日本人なら誰でも興味をそられる時代である。おまけに、西郷隆盛、高杉晋作、勝海舟といったスター級の登場人物にも事欠かない。なかでも、司馬遼太郎が描いた坂本龍馬は、今なら野球の大谷翔平選手や将棋の藤井聡太六冠く

は、歴史の虚実を冷静に分析する研究最前線の最新時代像を知る上で格好の書物である。神田外語大教授の町田氏によれば、龍馬が塾頭に就いたのは、幕府の神戸海軍操練所ではなく勝の私塾であり、亀山社中も実在しなかったらしい。彼が

# 歴史の文差点

富士通FSC特別顧問 山内昌之



らの有名な人だったと錯覚させるほどの輝きを放つ。しかし残念なことに、歴史の実像は文学の虚像とは相当に異なる。龍馬の場合もそうだ。最近出された町田明広編『幕末維新史への招待』（山川出版社）

薩長同盟を成立させる一翼を担ったことは間違いないにせよ、龍馬一人の功績ではなかった。また、船中八策の存在そのものを否定する学者もおり、大政奉還も龍馬だけの手柄とは言いがたい。こうなると、大方の日本

人の龍馬像がガラガラと崩れ落ちかねない。もっとも、この責任はわれわれ読者が勝手に龍馬を理想化しすぎる非歴史主義的思考にもあるといえよう。もっと地味なところでは、日本史教科書にある親藩・譜代・外様などの区分も最近では重視されないことだ。老中といえは譜

なら就任できるといふのだ。ところが、彼らが属した徳川の「領国」ではなく、別の「国」の主と見なされた「国主」という格式の大名たちがいた。国主は幕政に関与できない。前田・島津・伊達・黒田・細川などの国持大名は、徳川の領国とは別の「国」の主であ

# 常識否定の幕末維新史

代大名が就く職だと思いついでいた人には、幕末に蝦夷福山城主の外様大名が老中に就いたことを知って驚くかもしれない。この福山とは松前のことである。徳川林政史研究所研究員の藤田英昭氏によると、老中は3万石以上の城主が務める。譜代・外様を問わず、徳川の「臣下」

り、徳川は原則的に彼らの領地に介入できなかった。彼らはあくまでも「客分」なのである。客がさまざまな幕府役職に就くのはおかしいのだ。従って、国主大名は老中や側用人らだけが入れた「奥」の部屋に呼ばれることはない。この理屈を無視する映画や小説も多い。

龍馬の役割だけ強調されがちの大政奉還も、最近では何故に徳川慶喜が自分から進んで権力を手放そうとしたのか、新たな解釈が出されている。これまでは、慶喜は本心では將軍中心の徳川絶対主義路線を考えていたと主張する学者もいた。最近では、むしろ慶喜は朝廷中心の公議政体で自分が主導権を取り、天皇を形式的に上に立てながら、自分が朝廷の中心を占める政権構想を練っていたという見方も強い。司馬遼太郎は慶喜を優柔不断と日和見の徒として描きがちだが、実際には冷静に自己の力関係を測り、熟慮を重ねながら大政奉還などの重要事項に決断を下したという大東文化大教授、久住真也氏の主張も説得的ではないか。

(やまうち まさゆき)